

## 震災復興ボランティア団体「おもいでかえる」さんを訪ねて。

「おもいでかえる」さんは、仙台市若林区と宮城野区の瓦礫の中から拾い集めた写真をはじめとする思い出の品を洗淨、保管、公開しています。写真の展示・返却会場で理事長の野瀬香織さんにボランティアの現状についてお話を聞きました。

**編集部・矢島**…震災から2年半経った今でもあまりにも膨大な写真があり、改めて震災の爪痕の大きさを感じます。

**理事長・野瀬香織さん**…ええ。私たちの団体だけでも約20万枚もの写真が残されています。被災したみなさんの生活基盤が

すっかりできるようなになれば徐々にニーズが減ってくると思うので、これからも復興と共に歩んで行かなくてはなりません。

**矢島**…「おもいでかえる」さんは震災の1年後から活動を開始されていますが、当時と状況は変わりましたか？

**野瀬**…汚れの酷いものや状態の悪いものの洗淨がようやく終わりました。最初は専門の職員もいなくて、ただ水でじゃぶじゃぶ洗うというのが続いていたんです。枚数の管理もできていなかったし、洗ったものを保管している場所も被災者の方にはまるで伝わっていないような状況でした。

**矢島**…現在は本当に細かく丁寧に分けられ、とても見やすく展示されていますね。

**野瀬**…そうですね。でも、私たちはボランティアであってプロではないので、みんなが自分の得意分野を活かして精一杯やってきただけなんです。洗淨方法は富士フィルムさんが一緒に実験を重ねて下さいました。当初は「とにかく水洗いをしなきゃいけない」と言われていたが、実は「乾燥させれば劣化は進まない」ということが分か

りました。写真の保護層が壊れて着色層まで侵食しているものは、不用意に水洗いすると白くなってしまいます。富士フィルムさんの呼びかけでサミットに2回開いて、自治体や団体のみなさんと情報交換もしています。

**矢島**…2年前に閉上の集積所を取材させて頂いたときも、富士フィルムさんの写真洗淨に関するお話を伺いました（V.O.R. 38、カメラ日和HP参照）。

**富士フィルム・板橋祐一さん**…今回の返却会では、写真に関係する営業部門の新人社員を中心に、お手伝いさせて頂いています。写真の尊さを学ばせて頂ける良い機会になっています。

**野瀬**…長期化するほどボランティアの負担が大きくなるので限界もあるのですが、写真が持ち主の方に返っていくのを見るとやっぱり思い出を返すお手伝いはまだまだ必要なんじゃないかって。震災から一年、二年と経つにつれ、みなさんの表情も変わってきましたし、笑顔の数も増えました。以前は会場に足を踏み入れるだけで、涙を流して帰って行かれる方もたくさんいらっしやいました。だんだんと素直に喜んで頂けるような光景が見られるようになってきました。

**矢島**…野瀬さんは小学校でボランティア活動について講演されてましたよね。

**野瀬**…大人から伝わる情報ですごく一方的で、子どもたちが



集められた写真は自衛隊やボランティアの方たちが拾ってくれたもの。会場では、写真から得られる文字情報などをとくに細かく分類され見やすく展示されている。

それを鵜呑みにしてしまうことが多々あるんです。先生が「ボランティアってすごいんだよ」「見返りを求めないで頑張っているんだよ」と美化しようなことを言うと、子どもも「そうなんだ」と思ってしまうんです。でも、実際はもつと身近なことですし、いろんな事情が絡んでいるものです。例えば「自分がその立場に立たされたらどう思うか」と想像すれば、「自分だったらこうして欲しい」とか「じゃあ何が出来るだろう」などと想像することが出来るはず。そういう気持ちでボランティアという行動に繋がっていく、ということが伝わればいいなって。

**矢島**…素晴らしい活動だと思えます。これからボランティアに参加したいという方にとってはどんな作業がありますか？

**野瀬**…様々です。基本的には汚れたアルバムから写真を取り出して、洗淨して乾燥させて、最終的にポケットアルバムに収めること。展示会前であれば会場の設営のための力仕事や、写真を管理するうえでナンバリングをする作業もあります。被災者の方々に寄り添う気持ちを持って来て頂けるとうれしいですね。

**矢島**…遠くから一日だけ来られるという方でも大丈夫ですか？

**野瀬**…もちろん一日でも構いません。むしろここまで来られるのなら、ボランティアよりも被災地に足を運んで頂きたいですね。どんなところで拾われたものを洗淨しているのかというこ

とを理解してもらいたいからです。私がボランティアを始めたきっかけは、ボランティアと被災者が接する機会がないことに疑問を感じたからなんです。私は被災した立場なので、間に立って「被災した人はこういう状況なんです」「ボランティアのみなさんが一生懸命洗淨してくれました」と両方に伝えながら出来ればいいなと思って。今後は写真をデジタル化しなればとも思っていますが、みなさんに現物を見せたい機会を優先させています。現物を見ることで被災した日のことを思い出してしまいうこともありますが、それを経験しないと現実を受け入れられないというが、現実なんだと受け入れることが自立への第一歩なんじゃないかと思っています。それと、ご自分の写真じゃなくても、手に取って見て頂きたいと思っています。



「おもいでかえる」理事長の野瀬香織さんとボランティアリーダーの金谷竜真さん